



明けましておめでとうございます。

以前グローバル通信で紹介しました「日本の教育制度改革」がいよいよ本格的になってきました。近いうちにその詳細について紹介致します。

さて、新春第1号はイギリスに留学している出納先輩の寄稿文を掲載します。ロンドンでどのような学生生活を送っているかよく分かります。長文ですので、2回に分けて掲載します。是非熟読して下さい。

## 1 はじめに

皆さん、新年明けましておめでとうございます。海城中・高等学校卒業生で、現在はキングス・カレッジ・ロンドン(ロンドン大学)(以下「キングス」と表記します)の哲学部で学んでおります、出納楽です。時が経つのは早いもので、最初の寄稿から既に半年が経とうとしていますが、在校生諸君及びその保護者の皆様、また先生方におかれましては、お褒めなくお過ごしでしょうか。

さて、前回の記事では、「海城から海外の大学を目指すこと」について、皆さんとの情報共有を図ることで、「海城で真剣に学校生活に取り組めば、海外の難関大学に進学することは全く難しいことではない」というメッセージを発信させていただきました。しかしながら、その内容はかなり抽象的なものに留まってしまい、私が学生として現地でどのような生活を送っており、またこれを通じてどのような経験をしているのか、といった具体的な話題を十分に扱うことができませんでした。従って、今回の記事では、「今年度1学期の学校生活」に照準を絞り、ロンドンでの学生生活の魅力をより分かりやすくお伝えしたいと考えています。

本稿の主な目的は、今年度第1学期の私の学生生活の様子を具体的に説明することで、ロンドンの大学で学問を追究することの魅力をご理解いただくことです。そこで、以下本文を「キングスの哲学部の教育制度」、「今年度第1学期の学習内容」そして「パピノー教授特別インタビュー」の各節に分けて詳説します。その結果、海外の大学への進学に少しでも興味を持っていただき、在校生諸君の将来の進路選択の際の一助になれば幸いです。

## 2 キングスの哲学部の教育制度

本節では、キングスの哲学部でどのような形式で教育が行われており、またその学生が実際にどのような生活を送っているのかを概説します。

まず、年間日程の概要から説明します。キングスでは3期制を採用しており、第1学期は9月下旬から12月上旬、第2学期は1月上旬から3月下旬、そして第3学期は4月下旬から6月上旬という日程でスケジュールが組まれています。第1学期と第2学期は授業が行われる通常の学習期間ですが、第3学期は原則的に審査のみが行われる学年末試験期間となっており、前者は各10週の授業期間と、課題や自主学習に専念するために授業がない「リーディング・ウィーク」と呼ばれる各1週の計11週で構成されています。すなわち、キングスの学部生たちは、第1学期中の11週間と第2学期中の11週間で授業や課題に取り組み、各学期の間にある休暇を有効活用しながら、第3学期に行われる学年末試験に備えるという形で学校生活を送っています。

次に、授業についてお話しします。キングスでは、1つの授業が50分単位で行われています。

基本的に、大学は午前9時に始業して午後6時に終業するため、1日あたり9つのスロットが、従って月曜日から金曜日までの1週間で計45のスロットがあり、その中のいずれかに参加すべき授業が入っているということになります。キングスの哲学部では、授業の形式は「講義」と「セミナー」の2つに大別されます。講義は、一般に皆さんが想像されるような講義形式の授業で、教授や講師といった先生方が各週のテーマに沿って、取り扱う哲学思想や理論の解説と検討を行い、知識のインプットに主眼が置かれた授業が展開されます。一方でセミナーでは、講義で習得した知識を積極的にアウトプットすることが重要視され、主に少人数でのディスカッションやディベートを通じて、互いの主張を聞かせ、批判的に評価し合う形で授業が進んでいきます。哲学部では、1つの科目(正確には「モジュール」と言います)につき講義とセミナーがそれぞれ1コマずつあるため、1週間で1科目あたり2時間分の授業に参加することになっています(※左下の写真は「哲学と人種」というテーマで行われた哲学部有志によるセミナーの様子です。哲学が白人男性による学問の独占を如何にして克服していくかを話し合いました。キングスの哲学部の学部生や大学院生たちが参加しています)。



最後に、これらの枠組みに従って、学生たちが課程を通じてどのように学習を進めていくのか説明します。一部を除き、英国の大学における哲学の学部課程は通常3年間で、キングスでも同じく3年かけて勉強します。1年生の際は、履修する科目は全て必修のため、特に選択科目はなく、第1学期に「ギリシア哲学I」、「倫理学I」、「初等論理学」及び「認識論I」の各4科目を、また第2学期に「形而上学I」、「近代哲学I」、「政治哲学I」及び「哲学的方法論」の各4科目を履修した後、第3学期終了までにこれら計8科目の試験を受けるという年間構成になっています。1年生の課程を修了し、2年生に進級すると、各自の哲学的関心に照らし合わせて、自らの興味がある科目をある程度自由に選択することができます。私は現在2年生ですが、例えば、第1学期に「近代哲学II:ロックとバークリー」、「形而上学II」、「政治哲学II:政治哲学の歴史」及び「心の哲学」の各4科目を、また第2学期に「倫理学II:倫理学の歴史」、「認識論II」、「近代哲学II:ライブニッツとスピノザ」及び「言語と論理の哲学」の各4科目を選択しています。2年生の課程を修了し、3年生に進級すると、科目選択に関する制限がなくなるため、自分の関心のある領域を専門的に研究できるようになります。この最終学年では、年間8科目を選択するか、年間6科目に加えて卒業論文の執筆を行うかの選択ができます。換言すれば、キングスの哲学部では、審査期間である第3学期を除いて、1つの学期につき4つの科目を、すなわち年間計8つの科目を履修することができ、学年が上がるにつれて徐々に自らの専門性を高めていくという形で教育が行われています。

つまり、キングスの哲学部の学生は、年間計22週の学習期間とその間にある休暇を有効活用しながら勉学に励み、各学年末の試験に臨むという形で生活しています。学期中は1週間あたり約4コマずつ設定されている講義とセミナーに出席し、またそれらの授業で最大限のパフォーマンスを発揮するための事前学習にも十分に時間を費やすことで、3年間のカリキュラムを通じて次第に専門性を高めていくこととなります。

## 3 今年度第1学期学習内容

本節では、今年度第1学期に私が実際にどのようなことを学習していたのかを具体的に説明します。



まず、私が今年度第1学期に取り組んでいた哲学の領域について概説します。前節で述べた通り、1年生の間は必修科目の履修を通じて、哲学における重要な分野を一通り学習することで、進級した際に自分が将来どのような領域を専門的に取り扱うかを定めるための基礎的な教養を培います。私は1年生の課程を通じて、主に3つの領域に興味を持ちました。1つ目は、「認識論」です。認識論とは、簡単に言えば、人間の知識を考察する学問です。例えば、「知識が知識たるための必要条件または十分条件とは如何なるものか」、「知識には何らかの源があるのか」、「知識はどのような構造によって支えられており、またそれに限界はあるのか」また「人間は如何にして知識を獲得しうるのか」といった問いを検討します。2つ目は、「形而上学」と呼ばれる分野です。形而上学とは、誤解を承知で言えば、現実が本質的に如何なるものであるかを考察する学問です。恐らく最も手強い問いの1つでありながら、皆さんも一度は考えたことのある形而上学の問題が、存在論に関することでしょうか。例えば、形而上学における存在の問いは、「この現実、もし可能であったとして、一体何が存在し得るのか」といった形で表現できます。3つ目は、「心の哲学」です。心の哲学とは、その名の通り、とりわけ人間の心について哲学的検討を行う学問領域を指します。例えば、皆さんの周りには人が沢山いますね。友達や先生方といった顔見知りの人たちから、新大久保駅を行き交う全く知らない人たちまで、身の回りには様々な人々がいるでしょう。では果たして、そういった身の回りの人達は「心」を持っているのでしょうか。皆さんはきっと自分自身には心があると自然に考えていて、それと同じように周りの人たちにも心があると、少なくとも仮定して、日々の生活を送っていると思いますが、果たしてその信念は本当に正しいのでしょうか。心の哲学では、この「他人の心の問題」をはじめとして、人間の心をめぐる様々な哲学的課題を考察します。さて、この3つの領域を横断的に研究でき、また現代哲学で最も活発に議論されている分野の1つが、私が今年度の第1学期に中心的に取り組んできた「知覚の哲学」と呼ばれる領域です。知覚の哲学は、文字通り、人間の知覚が如何にして説明され得るかを哲学的に検討する学問です。皆さんは「マトリックス」という映画を観たことがありますか。この映画では、主人公が「現実」だと思って生活していた世界は、実は高度に発達したコンピューターによって作り出された「仮想現実」で、人間はコンピューターの活動するエネルギーを生み出すための電源として「飼育」されているという設定で物語が進行していきます。これを例に少し考えてみましょう。今皆さんは教室の中に設けられた自分の席に座っていて、目の前には机と友人の背中が見えて、教室の外では他の生徒たちの笑い声が聞こえる、といった状況にあるでしょう。常識的な感覚では、これらの「事実」は全く疑いがありません。皆さんは視覚、聴覚、嗅覚、味覚また触覚といった様々な知覚を通じて、この「世界」を経験していると考えることができます。しかしながら、もしその「世界」が、「マトリックス」に描かれたような「世界」、すなわち、皆さんが今知覚を通じて経験している「世界」が全て「幻覚」だとしたら、どうなるのでしょうか。言い換えれば、皆さんが「真正な知覚」であると思っている活動が、実は単なる「幻覚」過ぎないものであったら、どうしますか。現代の知覚の哲学は、こういった一見すると馬鹿馬鹿しい問いを極めて真面目に検討し、考えられる潜在的な批判を十分に回避できる知覚の理論を樹立しようとしています。つまり、私が今年度第1学期に取り組んでいた哲学的問題は、主にこうした知覚の哲学をめぐる課題についてであり、常識的な感覚を離れて、如何に厳密な知覚の理論を構築できるかということに高い関心を持っていました。

次に、キングスの哲学部で知覚の哲学を学ぶということが、どれだけ魅力的な体験であったかを、より具体的に説明したいと思います。前節でも少し触れましたが、今年度の第1学期に履修していた科目の1つが、「形而上学II」です。この「形而上学II」という科目は、「知覚の形而上学」という別名が付けられており、文字通り近くに関する形而上学的な理論的基礎付けが如

何にしてなされ得るかという問題を考察することが中心課題でした。実は、キングスの哲学部は、世界有数の哲学教育研究機関として広く認知されており、とりわけ知覚の哲学に関する研究については世界最強の呼び声も高い、非常に挑戦的な環境です。例えば、つい先日発表された、「研究の卓越性に関する枠組み」という英国内の高等教育研究機関を対象とした評価指標では、総合第3位にランクインしており、特に知覚の哲学を専門分野とする教授陣は、研究の最前線で活躍する大変な重鎮が揃っています。実際に、この「形而上学II」の担当教官（実際には「モジュール・チューター」と言います）は、知覚の哲学における物理主義（実際には「フィジカリズム」と言います）を主張する学派の第一人者であるデイヴィッド・パピノー科学哲学教授（以下「パピノー教授」と表記します）でした。パピノー教授は、「英国科学哲学会」、「マインド・アソシエーション」また「アリストレリアン・ソサエティー」をはじめとする哲学研究の最前線でその長を務めた経歴があるだけでなく、「ルドルフ・カルナップ講義」や「ゴットロープ・フレーグ講義」といった、世界的権威のみが招待され講義を行うことが許される名誉講義の担当者でもありました。「形而上学II」では、そのパピノー教授が、講義とセミナー双方で、直接学生を指導して下さるため、私の同級生たちも畏怖で戦々恐々としながら、毎週刺激的な授業を受けていました。私はこの授業が特に楽しく感じ、第1学期中に2回ある論文課題では、パピノー教授の理論を批判し、その批判に対する応答を、フィードバックを通じて直接いただくという貴重な経験ができました。その内容はかなりテクニカルなものであるためここでの言及は避けませんが、科目を通じて様々な哲学的知覚理論を研究できたことは、私の一生の財産になると確信しています。

まとめると、今年度第1学期に私が主に取り組んでいたのは知覚の哲学であり、その研究の最前線で活躍する世界的権威から直接指導を受けられるキングスの哲学部では、かけがえのない知的経験を享受することができました。（次号に続く）

「地球村プログラム」テキスト  
「地球村プログラム」実施に当たって採用するテキストがこの度刊行されました。

プログラムの内容が今ひとつ分からない方は、「グローバル通信第10号」の新貝先生の文章を改めてご覧下さい。（海城学園のホームページの「グローバル教育部」で読むことができます。）その紹介文と右のテキストの写真をみるとプログラムの概要がつかめると思います。

「地球村プログラム」の正式参加申し込みについては、1月下旬にお知らせします。仮申し込みのできなかった方も是非どうぞ。

地球まるごと5000年の時間軸で囲まれた世界を自由に旅し、人知が行って来たことのハイライトを体験することで、どういった地球村を作っていくべきかが見えてくる...

グローバル教育の開発・実践者によるバイリンガル独自教材、日本の高等学校に導入中。

こんな体験をしていただきます

- 世界の過去と未来、そして多様な文化とつながる。
- あなたができること、伝えたいことを明確にし、気持ちを伝える。
- ヤングサミットを開催し、グローバルな視点で人とつながる。

（海城学園）グローバル教育部（GADP）